

テクニカル ダイアリー

営農部営農振興課 水稲専門指導員 石井 枝里奈

やさいの里営農センター 営農指導員 中村 克己

ジャンボタニシ(写真③)は秋の水温低下や落水とともに土中に潜り、翌春まで越冬します。そのまま放置した場合、翌年の発生密度はさらに高まり、薬剤防

ジャンボタニシ対策



写真③ ジャンボタニシ(成貝)

年々増加しているジャンボタニシ(正式名: スクミリンゴガイ)や、難防除雑草のオモダカ、クログワイは、春の田植え後に発生してからでは防除しきれません。秋の稲刈り後から対策をして、翌年の発生密度を減らしておくことが重要です!

ジャンボタニシ・雑草防除は稲刈り後から!

年々増加しているジャンボタニシ(正式名: スクミリンゴガイ)や、難防除雑草のオモダカ、クログワイは、春の田植え後に発生してからでは防除しきれません。秋の稲刈り後から対策をして、翌年の発生密度を減らしておくことが重要です!

多年生雑草のオモダカ(写真④)とクログワイは、稲刈り後の9月下旬から11月上旬に塊茎を形成し、翌年に再び発生してしまします。秋から冬期に対策しておくことで、翌年の発生密度

難防除雑草対策

多年生雑草のオモダカ(写真④)とクログワイは、稲刈り後の9月下旬から11月上旬に塊茎を形成し、翌年に再び発生してしまします。秋から冬期に対策しておくことで、翌年の発生密度

を減らすことができます。

① 早期の稲わらのすき込み
翌春まで稲わらを残しておくことで、その下が保温されるため、ジャンボタニシが越冬しやすくなります。できるだけ早く稲わらをすき込み、越冬場所を減らしましょう。稲わら分解促進材(わらゴールド、アグリ革命など)を使用すると効果的です。

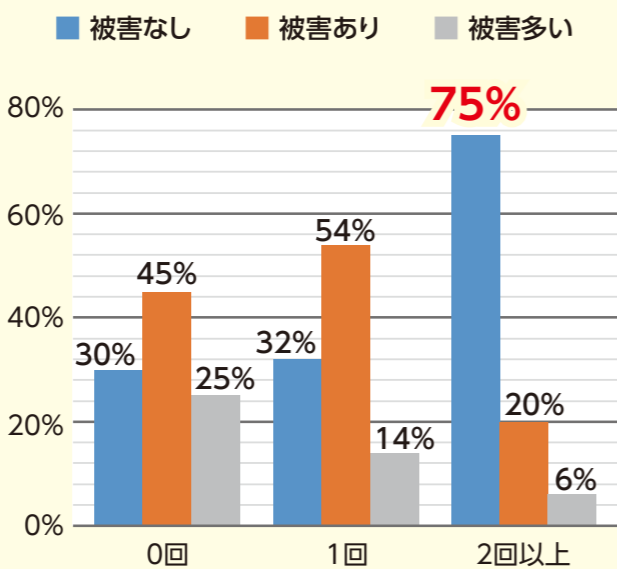
② 厳寒期に数回耕うん
厳寒期に丁寧に耕うん(走行速度は遅く、回転数は速く)することで、越冬中の貝を物理的に破壊します。また、寒さにあてることが殺菌します。耕うん回数が多いほど翌春の発生密度が低下し、被害を軽減することができます(図①)。

③ ウイルス病と思われる症状が確認された圃場では発病株を抜き取る、④トラクターなどの管理を最後に行い、土壌を他の圃場に持ち込まない、⑤堆肥等を投入し土壌の改善を行う、の5つです。



写真④ 稲刈り後開花しているオモダカ(地下部では塊茎を形成し始める)

図① 耕うん回数による被害程度別圃場割合



(注) 山武市の水田152圃場を対象に、平成29年の水稲栽培後8月~翌1月に行われた耕うん回数を調査し、翌年5月に圃場ごとの被害程度を達観調査により確認

(「ジャンボタニシ防除のすすめ」令和2年11月 山武農業事務所作成)

① 稲刈り後、早めに地下部まで枯らす茎葉処理除草剤(ラウンドアップマックスロードやタッチダウンIQなど)を散布

し、塊茎形成を阻害する。② 秋期の耕うんにより塊茎を地表面に出し、冬期の乾燥により枯死させる。

昨年度は、本圃定植後の生育はおおむね順調に推移しました。しかし、年明け被覆前の低温と暴風により、茎葉の傷みから圃場の生育にばらつきが見られ、樹勢を維持できずに収量が大きく低下する圃場が見られました。

昨年度の振り返り

次年度対策

被覆時期と倒伏軽減策と圃場の選定および定期的な灌水

越冬するときの本葉数が5枚以上になると耐寒性が弱くなり、寒害を受けやすくなります。特に被覆開始時期が早すぎると生育が進みすぎるため、1月下旬以降を目安に被覆を行うようにしましょう。開花期以降の乾燥は、結実や莢の充実不足を招くため、保水性の良い圃場の選定または定期的な灌水(例: 通路灌水)など、事前の対策が必要です。

倒伏軽減策として、被覆ビニール除去後、ナイロンテープな

ソラマメ病害虫防除

えそモザイク病

えそモザイク病は土壌伝染性のウイルス病で、感染した場合、株が萎縮し、葉や莢にえそ症状が出るのが特徴です(写真①)。

② 早期に発病すると生育が停止し、収穫に至らないこともあります。

対策としては、①連作を避ける、②水はけの良い圃場を選ぶ、



写真① えそモザイク病(葉の症状)

③ ウイルス病と思われる症状が確認された圃場では発病株を抜き取る、④トラクターなどの管理を最後に行い、土壌を他の圃場に持ち込まない、⑤堆肥等を投入し土壌の改善を行う、の5つです。

えそモザイク病(実の症状)

ネキリムシ

近年、ネキリムシが多発傾向にあります。幼苗時期に茎を食害され、枯死して欠株となり減収につながります。生育初期にガードベイトA(10坪当たり3キ)を株元処理してください。土壌消毒も選択できますが、専用



写真② えそモザイク病(実の症状)

の機械が必要なため、手軽に使用できる薬剤をお勧めします。

アブラムシ類

アブラムシは、トンネル被覆内や暖冬傾向で気温が高い状態の場合、活動が続きます。生長点に生息し、葉や茎の汁を吸うため、株の生長が止まります。定植時にアドマイヤー1粒剤(1植穴当たり2g)を土壌混和して発生を予防し、多発する前に十分に防除を行うことが重要です(表①参照)。

表① ソラマメのアブラムシ防除薬剤

薬剤名	使用量・希釈倍率	使用時期	使用回数
アディオン乳剤	3000倍	収穫7日前まで	3回以内
モスピラン顆粒水溶剤	4000倍	収穫7日前まで	3回以内
スミチオン乳剤	1000倍	収穫3日前まで	3回以内

8月の分析経過について	
残留農薬分析点数	合計4点
多成分一斉分析	秋香ゴボウ 1点
	抑制トマト 1点
	抑制ミニトマト 1点
	サツマイモ 1点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

土壌診断点数 合計24点